
adventureworld (悪魔の逆襲、奇跡の光刀)

鎌田秀康

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

adventureworld（悪魔の逆襲、奇跡の光刀）

【Nコード】

N2449E

【作者名】

鎌田秀康

【あらすじ】

この物語は、様々なアニメの登場人物たちや、私独自に作った登場人物たちが、力を合わせて、悪魔の軍団と戦うという話である。だが、この前と違って団結力が良く、悪魔の作戦は成功することに……。本部囚人（アニメの登場人物たちの暮らしている修行や自由施設）は占領されていく一方で、光刀の封印された力がよみがえる。そしてこの後、反逆なるのか……。

プロローグ

東京都世田谷区、菊本にある帝国本部（世田谷本部帝国）。

ここは悪人を取り締まり、英雄の人々が暮らすいわば、世界が認められた施設なのだ。

今その施設は世界に広がり、様々な英雄が階級を持って暮らしています。

本部囚人の目的は平和の世界にすることである。

そんな帝国本部から離れたところにあるマンション……。そこは紫の霧が舞っていて、入ると出られなくなるといっくらいである。そしてマンションには、コンクリートに無数のひびが入っている。階段もぼろく、扉は開けるだけで、すぐ壊れてしまっくくらい古びている。電球は着いてなく、蝋燭だけが頼りになる。

そんなおんぼろマンションは別名、闇のマンションと呼ばれているのだ。

なぜそう呼ばれているのかは、その一部屋一部屋には、数十人の悪魔が住んでいるのだ。

悪魔は弱い人間を取り込み、魂を奪ったり、悪魔を作ることが目的である。

だが今は、本部囚人の阻止により、活動は停止されている。

平和の世界を創るためには悪魔たちに邪魔されないようにするためだ。

……だが、そんなことはいつまでも続かない。

「……何かさ、俺たち悪魔なのに……、一体なにしているんだろうなあ……」

一人で呟いている黒ボールに一人の悪魔が言った。

「仕方ないでしょ。うちの行動はすべてお見通しなんだから……」

その言葉に黒ボールはつまんなそうに言った。

「あのさ、大悪魔なんだから恐れてどうすんの？それじゃあ俺たちの仕事の意味ないんですけど？」

「……………」

とつとつ無言になってしまった悪魔であった。

黒ボールは呆れ果てた。

黒ボールの正体はシャドウカービーである。シャドウは鏡の世界に留まっていたが、変な超空間のせいで、ここの地球に来てしまったのだ。

シャドウはさまよってついたのが、この闇のマンションだったのだ。

そして彼と話しているのは、悪魔の頂点に立つ後継者。悪魔の上の大悪魔、沙瀬川桐子であった。本部囚人に阻止される前は、デビルソルジャーとして、作戦を立てたり、心の弱い人間だけではなく、強い心の人間を簡単に取り込めることだって出来ていた。

だが、本部囚人を攻めたせいか、敗れてしまったのだ。

それからというもの、人間を取り込むことすら出来ずにいる状況なのだった。

「みんなだつてもう限界なんだぞ。それなのにいつまでも命令を聞き続けていると……………」

「うるさい！」

シャドウの言っていることに腹がたつたのか、古びた机を思いっきり叩いた。

「私だつてちゃんと考えているよ！でも……………、本部囚人を破らない限りそんなことをしても、また逆戻りじゃない!？」

桐子は戸惑うことなく言った。

それを聞いたシャドウは溜息をついて言った。

「まあ、確かにそうだよなあ。本部囚人にはあいつもいるからね……………」

「。はあ、何かいい作戦はないかな……………」

「おい、どうした？」

「いい作戦思いついた……」

そう言ったシャドウは立ち上がって叫んだ。

「よっしゃ〜！この作戦がうまくいけば、もう命令される人生から抜け出せるぞ〜！！」

そして、思いつきり笑ってから桐子の方に向いた。

「とうわけで桐子様。富羅田を呼んできてください」

「はあ。あんな医者が何の役にたてるの？」

「とにかく呼んできてください」

彼女は溜息をついて、富羅田という悪魔の部屋に向かった。

シャドウの考えた作戦は一体なんなのか。そして、その作戦は本部囚人を最悪な方向へ進ませる。

第1章：悪魔解放、世界侵略作戦作動

東京都世田谷区、本部帝国には、たくさんの施設が建ち並んでいた。

警察署、消防署、高等学校、放送局、スタジアムなどが周りを囲っている。その中心にある施設が、本部囚人の本部なのだ。

地下5階建て、地上40階建ての高層ビルの隣には、地上15階建ての駐車場が設けられている。

そしてこの本部帝国こそが、本部囚人のA軍本部なのだ。

高層ビル地上8階のトレーニングルームでは、2人の戦士が修行をしていた。体育館並みで造られたトレーニングルームは何もなく、あるとしたら超大型画面だけだ。

修行が終わったのだろうか、身体を動かしていた2人は床に座った。

「はあ……、はあ……。普段の生活より身体を動かすのは大変だな……」

「当たり前だ。それくらい動かさないと力が強くない」

2人の会話がトレーニングルーム内で響く。

「確かお前はちゃんとした神様になったんだよな？」

「まあ、あの時は仮免だったけど、もうそうじゃない」

「じゃあ神様なら治様みたいに奇跡を使えるようにしないと」

「……別にそこまでしなくても」

彼がそう言うと、神様は苦笑いをしながら言った。

中岡槇之輔。神様を修行させていた人である。槇之輔はA軍の大佐であり、極上級の神様でもある。戦闘はいつも中心になって部下を纏めていた。それもそのはず、彼は部下に一度も負けたことすらないのだから。

一方で、修行をしていた神様は、神山佐間太郎である。佐間太郎

は小説、神様家族の主人公で、A軍の大尉として、活躍している。槇之輔と違って彼は、説得で立ち向かうという超危険なことしか出来なかった。

そんなことでは幾ら命があっても保たないと思った槇之輔は、彼を強くしようとした訳であった。

「とにかく今日はここまでだな」

時計を見ながら言った槇之輔は、立ち上がり、トレーニングルームを出ていった。

何しろ大佐なのだから無理ない。計画通りに進行しなければいけないのだから。

トレーニングルームで一人になった佐間太郎も、トレーニングルームを後にした。

高層ビル最上階、ここは提督と小尉を中心とした部屋が並んでいる。

槇之輔は自分の階級部屋に戻って、次の仕事を始めた。『地球の人々の悩みを叶えるため』というアンケート用紙に印鑑を押す作業だ。

槇之輔は、大量にあるアンケート用紙を、一枚一枚読んでいき、印鑑を押すという大変な作業をこなしていった。

数時間たって作業は終了した。彼は

「ふうっ」

と息を吐いてから、外の景色を眺めながら言った。

「平和な世界はいつになったら来るやら……」

闇のマンションでは、悪魔の代表が集まって会議を初めている。

「え〜と〜、私たちは悪魔の仕事を完全に忘れているのではありませんか？」

シャドウが問いかけるとみんな頷きながら言った。「全くだ！いつまで命令を聞いてなきゃならないんだ！」

「そうだそうだ！なぜ悪魔なのに命令を聞く必要があるのだ！」
たくさんの苦情の声にシャドウは落ち着かせ、話を続けた。
「てなわけで、私たちの悪魔の解放作戦はこういうふうになった」
そう言つて彼は、ある作戦用紙を配つた。そこに書かれていたこ
とはこうだ。

悪魔の命令解放作戦

作戦内容

- ・まず第一に、本部囚人にいる人間の血液を盗む。
- ・そこに弱い人間の採つた魂に染み込ませる。
- ・そうするだけで、本部囚人にいる人間をコピー出来る。
- ・それを利用して本部囚人を逆に阻止する。・その後霧を世界全土へ広め、悪魔の世界と化する。

と書かれていた。

「本当にこれうまくいくんですか？」

とある悪魔の問いかけにシャドウは机を叩いて叫んで言った。

「バカヤロウ！！うまくいくに決まってるだろう！それとも何か？

失敗するとも思つてんのか！！」

「は、はい……。すみません……」

「でも魂はここにはありませんよ？」

とある悪魔の質問にシャドウは溜息をついた。

「はあ……。岡崎、なんでそんなことに気付くかなあ」

どうやら彼も考えてはいなかったらしいようだった。

「そんなの採りに行かなくちゃなぶつうないだろう？」

「わかりました。」

「では、この作戦を始める。言つとくけど、これは絶対失敗は許さ
ないからな……。わかったか！」

「はいっ！」

adventureworld (悪魔の逆襲、奇跡の光刀)

これまで一度も動いていなかった悪魔たちが、また自由に出来るという達成にこれまでと違う空気が流れてきた。

シャドウは笑いながら自分の部屋へと戻って行った。

第2章：盗まれた血液、本部囚人の大会議

夜の11時、本部帝国前譜庫区病院。　　この病院には、たくさんの人々の血液が保管されているだけでなく、本部囚人にいる囚人たちや、英雄の人たちの血液も保管されている。

今の時間、医者の子休暇の為、病院は閉まっていた。

だが防衛機械は作動されている。赤外線レーザーや、防犯カメラ、特殊警戒機械類が網の目の様に張り巡らされている。

しかし、悪魔たちにはそんなものは通用しなかった。

赤外線レーザーを慎重に突破していき、防犯カメラに見つからないように血液室に向かった。

血液室に着くと、ドアノブの辺りにある特殊警告機械をハッキングし、血液室の扉を開けた。

血液室の中は、大量の血液を保管しているため、探すのは困難であった。

数分経って、本部囚人の血液保管棚を見つけ、英雄の血液だけを選び、見つからないほどの量を採取し、病院内から出ていった。

「血液採取を終了しました」

病院から採った何10本の注射器をシャドウに渡した。

「ご苦労だな。後は魂のみ……」

と言っている間に別の悪魔から通信が届いてきた。

『魂を何10個が集まりました』

「はい、ご苦労。至急こっちに戻ってこい」

『了解しました』

そして通信は閉ざされた。

しばらくたつと、魂を担いだ悪魔が現れ、彼に魂を渡した。

「こんなに魂がすぐ集まるなんて……。所詮人間は弱いのか」

シャドウは血液と魂を別の部屋へと持っていき、実験は始まった。

「富羅田。上手くいくか？」

シャドウは気になって富羅田に問いかけた。

「まあ、想定時間は掛かりますけど、上手く行きますね」

「だいたい何時間掛かる」

「一人の場合、5時間ですね。後は本部囚人に見つかからないかですね。いわば時間の問題だな」

「……………」

富羅田の言葉にシャドウは黙りこんだ。

「冗談じゃない。時間の問題だと……。せつかく解放されるというのに、失敗なんて許されるか。」

彼の心にはこの言葉以上のことは考えなかった。

「なるべく早く終わらせる様に頑張ってくれ」

富羅田にこう言い、シャドウは部屋から出ていった。

後は彼自信に掛けよう。私は見守るだけだ。

本部帝国では、週に必ず行われる全体会議を行っていた。

「え〜と、本部囚人A軍全体会議を始めます」

と言った具合で会議が始まるのだ。会議を行う司会者は、ピンクカービィである。

カービィはいわば、星のカービィの主人公で、A軍の上等兵として活躍している。

そしてその隣に座っている人は、A軍の提督である目々澤南。

カービィに近い前の席に座っている6人は、A軍大佐の槇之輔とその隣にいるA軍中佐の内破佐介。

彼はナルトのアニメで活躍している2番目の主人公。

そして佐介の隣にいるのはA軍小佐の稿田神谷。

彼は通称キツスで、冒険王ビィトで活躍している3番目の主人公。そして神谷の隣はA軍大尉の佐間太郎で、そのまた隣はA軍中尉

の蟻川大智、そして大智の隣はA軍小尉の伊藤達義である。

そして6人の後ろの列は、A軍の軍曹であるケロロ。

彼はケロロ軍曹の小説やアニメの主人公。

そしてケロロの隣の列にいるのはケロロ小隊のメンバーである。

A軍曹長のクルル、A軍伍長のギロロ、A軍兵長のドロロ、A軍二等兵のタママという5人の小隊が揃って会議に参加している。

その他に、ハヤテのごとく！の主人公であり、A軍三等兵の綾崎ハヤテ。その他に、たくさんアニメの登場人物たちが、本部囚人の会議に参加しているのです。

「今日は、人々の苦情についてお話しします」 カービイが今日の会議の議題を述べていると、ケロロが議題と関係ないことを質問した。「あゝ。さつきから思ってたんですが……、何で本部囚人って言うのでありますか？」

「はあ？」
「だってさあ、まるで我が輩たちが悪者みたいじゃない？普通囚人っていらなくな〜い？」

ケロロの質問にカービイは確信し、ちょっと議題を外して、なぜ本部囚人という名になったのかを説明した。

「いいか。本部囚人っていうのは、この世の人間を遙かに上回る。それに、こっちの囚人の意味は刑務所に行く訳でも全くない。本部囚人の囚人は、目標を果たすまで、永遠に戦わなければならない。たとえ死んだって天国や地獄へ行ってもな」

カービイが理由を答え終わると、
「わかったかな？」
と問いかけた。

みんなは確信した後、彼は別の話に移り変えた。

「では議題に戻ります。人間は主に、途轍もない苦しみを味わっています。そんなことを防ぐのも私たちの役目です。おわかり？」

カービイはみんなが聞いているのかを確かめる。そして彼は話を続ける。

「そういう訳で、みなさまに答えて私たちはどうすればそういうことにならないか意見を出し合います」

そしてここからは、意見争奪戦となるのだ。

「では、そっちから意見をどうぞ」

カービーが手を指した方から始まるのだ。

「はい。僕の意見は他人を悩ませることがないような生活を送らせばいいのです」

A軍総合長の宮幸平がいうと、反対か賛成の声が聞こえた。

(タママ)

「え、僕はそうは思わないですよ」

(亮太)

「おいおい、なに言っているんだ。そうすれば平和の世界なんてあつという間だぞ」

(瑞樹)

「で……でも、どういつぶつに不満を送らせない生活にするの?」

(久美子)

「そうですね。どういつ方法でその不満を送らせない生活にするのですか?」

(翼)

「なに言ってるんだよ!別になくなつてその方法を探せばいいんだよ」

(ギロ口)

「ふんっ!くだらんっ!そんなことで時間が掛かるとはな!」

(砂耶香)

「また長続きかな……」

話し合っていたのは、A軍二等兵のタママと、A軍三党氏の奥亮太、A軍事務官の小林瑞樹、A軍援護氏の江上翼、神様家族の第3主人公であり、A軍総長の小森(大森・神山)久美子、A軍伍長のギロ口、A軍看護長の中岡砂耶香である。

(勘太)

「あつ、そつだ。こんなだつたらよくない?」

(上官を除く全員)

「どういづの?」

(勘太)

「国会を乗っ取っちゃってさあ、俺たちが日本を動かさない?」

(サキ)

「そんなことしたら私たちは自由になれませんよ」

(勘太)

「……………」

(槇之輔)

「ついには話せなくなったな」

(范超)

「じゃあ僕のアイデアは……………」

(カービィ)

「お前はどうぞせ下だしでたらめだから却下!」

(マリア)

「かわいそうですね……………」

(テンコ)

「いや、何時もそうでしたからね」

(カービィ)

「もうう、誰か他にアイデアは……………って、何寝てんだ!」

(雄大)

「ZZZZZ……………。へっ?」

(カービィ)

「へっ?、じゃないだろう!とつとつと3日連続起きて1日寝るのは

やめろ!」

(雄大)

「だって寝ようと一生懸命だったもので……………」

(カービィ)

「……………この会議が終わったら麻酔薬やるから来いよ」

(雄大)

「……はい」

(鳴門)

「暇だってばよ」

(カービィ)

「うっせー！！お前は引っ込んでろ！」

(小雪)

「今日も元気ですね」

(夏美)

「いつも怒鳴っているからじゃないの」

(楓)

「まっ、所詮は上等兵でも司会者をやるのですから、当たり前ですかね」

ここまで話合っていたのは、A軍上等兵のカービィと、A軍放送指長の西原勘太、ハヤテのごとく！で活躍しているA軍九等兵のメイドの貴嶋サキ、A軍大佐の楨之輔、A軍納刃兵の高橋范超、ハヤテのごとく！の第3主人公、A軍四等兵のメイドのマリア、神様家族の第2主人公、A軍法務長の(神山)テンコ、冒険王ビイトの主人公、A軍報察長の浅崎雄大(通称ビイト)、ナルトの主人公、A軍考課長の渦巻鳴門、ケロロ軍曹の登場人物、A軍特撮兵の東谷小雪、ケロロ軍曹の第2主人公、地球最終防衛ライン、A軍官事長の日向夏美、ハヤテのごとく！の登場人物、A軍八等兵の野々原楓である。

本部囚人たちが話し合いをしている中、病院では……。

「さて、血液はどうなっているかな？」

血液室の扉を開けた医者が、血液量を検査していると、

「あれ？」と不思議な言葉を出し、首を傾げた。「ここにある血液の量が何か減っているような……」

医者は別の棚からある血液と、不思議に思う血液の量を比べた。

微妙に量の差がある。

adventureworld (悪魔の逆襲、奇跡の光刀)

「おかしいな。ちょっと田部井さんに聞いてみるか……」
そう言って医者はいったん血液室を後にした。

第3章：盗難血液行き先、ドツベルゲンガーの完成(1)

・今頃気付いた調査

本部囚人A軍の大会議は、中途半端で終了した。だが、前回も同じことなのだから仕方がない。

会議終了後は必ず自由時間が存在するため、皆は自由行動をしている。昼寝をしている人や、未だに修行をしている人や、テレビゲームをしている人など、自分独特の自由時間で楽しんでいる。

だがしかし、この後重大なことに気付いてしまう。

「えっ、血液の量が足りない？」

院長である田部井は疑問を抱いた。

「はい。全体は以上ありませんでしたけど……。何故か一部だけ量が足りてないんですよ」

「あんたまさか調子に乗ってるつもり……」

「本当ですよ。確かに他のと比べて診ても……」

医員のことは嘘だと想った田部井はこう告げた。

「いい、血液室に向かう道全てには、たくさんの防御システムがあるのよ。そんな中誰がここに盗みに来るのよ」

「そ、それは……」

医員にはこれ以上何も言われなかった。

確かに以前は金目的で進入した犯人が血液室に向かってしまい、防御システムが作動され、逮捕された。それ以上に、血液を目的にした犯罪などは全国で一度も起こってない。

「まあいいわ。一応あなたが言っていることは本当かもしれないから調査は行いましょうか」

そして医員に仕事を戻らせて、田部井はある場所へ連絡した。その場所は……。

A軍本部では自由時間が終わり、特訓を行っている。

道具を使用する訓練や、身体で使用する訓練の二つに分かれている。

道具を使用する主な物は、銃や剣、斧、鎌、刀、小道具などを使用する訓練である。

もう一つは身体で二つの特殊訓練がある。一つは格闘など中心とした訓練、もう一つは術を中心とした訓練がある。

術は主に、忍術や召喚、天撃、呪文、奇跡などを中心にした訓練である。

A軍はその得意とした訓練を選択し、訓練をするのだ。

訓練場では、所々で銃声音や、爆発音などが響きわたる。

訓練場の展望室では提督の目々澤と、B軍の小尉のイエローカービーが見学をしている。

「いや〜。相変わらず凄い迫力ですね」

「でもねえ。あれでも一応遊んでいるように見えるんだけど」

「へっ?」

目々澤の答えに疑問を抱くイエローカービー。

「ま……まじっ」

「私は何時だって真面目よ」

「な、なるほど」

確信しているイエローカービー。

すると、急に展望室の入口からメイド服を着たテンコが入ってきた。

良く見れば彼女は手に提督の携帯電話を持っていた。

「あの……、奈月院長から電話が入ってんですけど」

目々澤は彼女から携帯電話を受け取り、田部井へと連絡を掛けた。

「なあテンコ、お前さあ。ココへ来るのはいいけど……。何でメイド服着てんの?」

「いいでしょ、どうせ私の趣味なんだから」

「あの子、元から趣味なんかなかっただろ。お前最近おかしいよ」
イエローカービィの言葉にテノコは表情を変えた。

「私だって昔は好きで着てたんじゃないからね。でもマリア先輩が導いてくれたんだ。だから私は今でもこの服が慣れてんのよ」

彼女の言葉を聞いていたイエローカービィは……。

「ふうん、世の中はすごく変わって行ってんだなあ」

「ちよつとあなたたち、私はこれから電話をするので静かにしてもらえないでしょうか……」

目々澤の言葉で彼女は展望台を後にし、彼は大人しく訓練の見学をしていた。

(目々澤)

「もしもし。A軍本部の提督、目々澤南でありますか……」

(田部井)

「はい。こちら譜庫区病院の院長、田部井奈月です」

(目々澤)

「あの、さっきそちらから掛けた後があつたんですけど、何か御用でしょうか……」

(田部井)

「えつとですね。内の医員の方が血液室に保管されている血液の量に異変を感じたのですが、調べてもらえないでしょうか？」

(目々澤)

「わかりました。でわそちらにケロロ小隊と上等兵を送り致しますので……」

そして話を済ませて外線を切った。血液を盗まれてから12時間も過ぎていた。

第3章：盗難血液の行き先、ドッベルゲンガーの完成(2)

・困難な行方

血液が盗まれてから13時間後、血液量周辺検査が行われた。

「で、ここにありますか？例の異変の場所は……」

「はい、そうです」

医員に連れてかれて来たケロロ小隊とA軍特別調査の一人は血液室に向かった。

「で、セキュリティシステムには、異常はなかったのか？」

ギロロの質問に医員は……。

「はい。何時も通りに作動されていたんですけど……」

ピンクは周辺を見回して言った。

「確かに防犯カメラや赤外線レーザーには壊された跡や細工された跡すらないようだな」

そんなことを話しているうちに血液室に到着した。

そしてドアの周りに傷や跡などの入られたという形跡を探してみたら、何処にも無かった。

ケロロは頭が混乱しながら言った。

「ちよつと待ってよ！入られた形跡が無いってことは、どうやって入れたのよ！」

「入れる方法が一つあるぜえ」

「!!!!」

クルルの一言に小隊全員が彼の視線を向けた。

「で、何処をどういう風にして開けたんだ」

ギロロの疑問にクルルが

「くつくつくつ……」と言いながら答えた。

「これにハッキングされたんじゃないの？」

彼の指さした場所には特殊警告機械が設置された場所だった。

「そういうことか……」

「そう、奴らはこの機械をハッキングしてドアを開け、そして血液を盗んだって訳だ。俺が調べた結果、機械にはほとんど異常は見られなかったがハッキングされた形跡が残っていたぜえ」

だがそれに疑問を持ったタママがこう答えた。

「でも誰がなんの目的で盗んだんですかねえ」

「それさえ解ればねえ。くっくっく……」

みんなが考え込んだ。

「それより隊長殿。この結果を知らせないと……」

「ああそうでありました」

とにかく考え込むことより先に報告をしなくてはならないと思っ
たケロロ小隊たちは、血液室の調査を終了した。

目々澤に報告書を渡しに行ったカービィは彼女に調査の結果を報告した。

「カメラなどの異常はありませんでしたが、特殊警告機械にはハッキングデータが見つかりました」

彼女は報告書を観ながら結果の報告を聞いた。

だが、彼女に嫌な予感がした。

「嘘でしょ……」

目々澤の一言にピンクは汗ばんでいた。

「え、何か結果に不満が……」

「もう血液が盗まれてから14時間経っているじゃない……」

「えっ！ そんなバカな！」

だが彼も観て報告書に書いてあった時間にはもう14時間は経っていた。

「う、嘘……」

「早く館君に至急知らせて！」

「は、はい！」

館君とは大佐の楨之輔のことである。実際に言えば彼の本当の名

字である。

「はっ！血液が盗まれてから14時間経過している！」

「す、すみません！もうちょっと早めに調査をしていれば……」

彼は自分の部屋に居たが、その言葉を聞いて呆れてしまった。

「で、盗んだ奴は解ったのか？」

「それが……」

「解らなかったのか」

「……はい」

「はあ」

彼はとにかく盗んだ奴を考えてみた。

泥棒には血液など盗む意味なんてあるはずもない。しかも盗むにはその度胸だつてないはずだ。

「もしかしてあいつらじゃないだろうな……」

槇之輔は考えたくない奴らを考えた。だがあいつらは前回の戦いで降伏したはず。

でも最近のニュースでは暗殺された人が多数いた。しかも弱い心を持った人間が特に狙われた。しかも殺され方は皆同じやり方だったので同一犯の可能性が高い。

だがもしこの事件と血液の盗難が関係していたら……。

「何を企んでいるんだ、あいつらは……」

彼にはこの一言しか続かなかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2449e/>

adventureworld (悪魔の逆襲、奇跡の光刀)

2008年11月21日14時45分発行